

フッサールにおける「できる／できない」の現象学

浜渦 辰二

はじめに

私はもともと、現代哲学の源流の一つである現象学、その創始者であるフッサールとわけその「間主観性 (Intersubjektivität) の現象学」に取り組んできた。1984—86 年の 2 年間、(旧西) ドイツのケルン大学とヴッパータール大学に留学し、クレスゲス教授とヘルト教授のもとで学んだが、その間ずっとフッサール『間主観性の現象学』(フッサール全集第 XIII—XV 巻) を読んでいた。帰国後、浜渦 (1995) を出版した後も、フッサール (2001, 2012/13/15) の翻訳を始めとして、その研究を続けてきている。他方、この「間主観性の現象学」の研究と並行して、2000 年頃から、「人と人の関係」のあり方の一つの具体的で重要な場面として「ケア (care)」の問題に関心をもつようになった。きっかけになったのは、義父をすい臓がんで亡くしたことだった。余命 6 か月という告知を受けた義父を家族としてどう支えることができるのか、を考えるなかから、ターミナルケア (終末期医療) の問題を学ぶことになった。さらにその後、実母と義母とがともに認知症 (脳血管性とアルツハイマー病) になり、高齢者ケアの問題も考えざるをえなくなり、医学、看護学、心理学、福祉学、社会学といった他分野の方々と「ケア」についての共同研究を始めた。そんななかの 2008 年に、それまで教壇に立って来た静岡大学人文学部 (人間学、ヒューマン・ケア学) から、大阪大学文学大学院研究科 (倫理学、臨床哲学) に着任した。前任校で「ケア」の問題について考えて来たことを継承し、大阪大学に着任してからも、「ケアの臨床哲学～生老病死とそのケア」という連続講義を続け、「ケアの臨床哲学」研究会として公開連続シンポジウムを企画してきているが、それも「ケア」に関わる研究の一環である。

本稿では、そのような「間主観性の現象学」の研究と「ケアの臨床哲学」の研究とを架橋したい⁽¹⁾という関心を背景にしながら、あらためてフッサール現象学を読み直し、なかでも、フッサールの現象学が「できる／できない」あるいは「能力 (Vermögen) / 無能力 (Unvermögen)」さらには「正常 (Normalität) / 異常 (Abnormalität)」という対比をどのように考えていたかを考察することにしたい。とは言っても、フッサール現象学の枠内に厳格にとどまるのでもなく、それを安易に超えていくのでもなく、それを手掛かりに「できる／できない」の現象学の可能性を注意深く吟味することが、本稿の課題である⁽²⁾。

1. 「私は生きている」の「顕在性と潜在性」

フッサールは、『イデー I』(1912)の「現象学的基礎考察」においてデカルトの「コギト」という語を使いながら「自然的態度」について叙述した時、「コギト」という語を直ちに『『顕在的 (aktuell)』に生きているという根本形式』(III/1, 59)⁽³⁾と言い換えていた。また、デカルトの「我あり、我思う (ego sum, ego cogito)」という代わりに「私は存在する、この生はある、私は生きている、すなわち我思う (Ich bin, dieses Leben ist, Ich lebe: cogito.)」(III/1, 97)と書き、「この生」を「流れる生 (das strömende Leben)」(ibid.)とも呼んでいた。

この文脈で「生きている」とか「生」とか呼ばれているのは何だろうか。ふつつ私たちは、こう答えるだろう。生きているとは、息をしていること、食べること、飲むこと、排泄すること、座ること、歩くこと、等々であると。これらの行為は、生きていることの身体的側面に関わっており、身体なしには起こり得ない。しかし、生きているとは、さらに、感じること、欲すること、考えること、思い出すこと、期待すること、等々でもある。これらの行為は、生きていることの精神的な側面に関わっているだろう。さらに私たちは、生きていることは他者に話しかけること、他者に耳を傾けること、他者と対話すること、他者と一緒に何かをすること、等々も含んでいると言うかもしれない。これらの行為は、他者に対する身体的かつ精神的な関係を表しているだろう。

一般的に言って、身体的かつ精神的な生（生きていること）は、身体においてデカルトの言う「延長」という空間的な側面をもつだけでなく、フッサールの言う「流れる」という時間的な側面ももっている。それゆえ、フッサールは、「コギト」という語をデカルトより広い意味で理解し、デカルトのように、そこに精神的な側面だけを見て、そこから心身二元論を引き出すのではなく、「コギト」のうちに生の身体的かつ精神的という両方の側面を捉えていた。

彼は、『イデー I』で「志向性 (Intentionalität)」を現象学の根本思想として語ったとき、「私たちは志向性ということで、『何かについての意識 (Bewußtsein von etwas) である』という体験の特徴を理解している」(III/1, 188)と述べていた。しかし、後に、『第一哲学』(1923年講義)などでは、それを「意識」ではなく、「意識生 (Bewußtseinsleben)」という合成語で言い換えるようになった (VIII, 120 et passim)。こうして、彼は、デカルトから「コギト」という語を継承しながらも、それを「考える (denken)」ではなく、むしろ「生きている (leben)」という語で捉えようとしていたことが分かる。

しかし、さきほど、フッサールが「コギト」という語を『『顕在的』に生きている』とも言い換えたと言ったが、これは何を意味しているのだろうか。

彼は、狭義の「コギト」は「顕在的に」遂行されていることだが、広義の「コギト」は

「非顕在的つまり潜在的」に行われることも含んでいる、と考えている。そして、「コギトは『私は意識の作用を遂行している』を意味し、この固定された概念を維持するために、コギトとコギタチオーネスというデカルト的な表現をとっておくことにする」(III/1, 73)、としている。フッサールにとって、狭義の「コギト」は、そのような顕在性において遂行される作用のみを意味し、顕在性と潜在性を含んだ、広義の意識生の全体を含んではいない。したがって、彼は、「顕在的な体験 (Erlebnis) は、非顕在的な体験の『庭 (Hof)』に囲まれており、体験の流れは顕在性だけから成っているのではない」(ibid.) と付け加えている。こういう文脈において彼は、「庭」「背景 (Hintergrund)」「地平 (Horizont)」といった概念を導入している。それゆえに彼は、「顕在的に知覚されたものは、未規定の曖昧に意識された地平によって、一部は浸透され一部は取り囲まれており、[...] 決して完全には規定されえないような地平が、必然的にそこに広がっている」(III/1, 57)、と述べていた。

あるいは、例を挙げながら言い換えて、次のようにも書いている。「何かを掴むことはそれを取り出して掴むことである。つまり、知覚されるものはすべて、或る背景をもっている。紙の回りには本や鉛筆やインク壺などがあって、それらも或る仕方ではやはりまた『知覚されて』いる」(III/1, 71)。それらは現にその「背景」にあり、このような「背景の知覚」もまた、一つの「志向性」なのである。「志向性」という根本概念はいまや広義に理解され、それは、顕在性のみならず潜在性をも含んでいる。それゆえフッサールは、志向性は「顕在性という特殊な様態で『遂行され (vollzogen)』ていなくとも、すでに『背景』において『発動している (regen)』(III/1, 189)、と述べ、それを後には「地平志向性 (Horizontintentionalität)」(XVII, 207) と呼ぶことになる。

それでは、潜在性のうちにある「背景」や「地平」の知覚はいかにして可能だろうか。例えば、私の前に一軒の家があるとしよう。私はその家の正面を見ていて、ここからはその側面や背面は見えない。しかし、私がその周囲を回ることができれば、側面も背面も見ることができる。あるいは、ここから見ていた時ですら、それが私の家だったら、それが側面や背面からどう見えるのかを思い出すことができる。いかにしてそれは可能なのだろうか。『イデー I』(1912)より7年前の講義『物と空間』(1905)で、「私の身体 (Ichleib)」(XVI, 10, et passim)⁽⁴⁾という考えが論じられている。この講義で彼が展開した重要な論点は二つあって、一つは、「物の知覚は、背景から掴み出されたものの知覚」であるということで、これはいま言及した『イデー I』でもすでに述べられていた論点だが、もう一つが、「知覚は、私の身体への関係をもつ」(XVI, 10) という論点である。

一つ目の「背景」「地平」に関わる論点について、念のため、この講義『物と空間』からも次のようないくつかの関連する叙述を引用しておこう。「物は、知覚された正面より以上

のものである。本来的（*eigentlich*）な現出と非原本的な現出は分離されず、広義での現出において統一されている」（XVI, 50）。「現出には、見えるものが見えないものを指示していることが属している」（XVI, 245）。「物が見られるとき、見られた物とともに『間（*Zwischen*）』も掴まれている」（XVI, 261f.）。

一つ目の論点の補強はこれくらいにして、いまは二つ目の「私の身体」に関わる論点に話を進めることにしよう。そこで、「地平」は「私の身体」との関係のなかで開かれることが見えてくるはずである。

2. 「私の身体」

この講義『物と空間』においてフッサールは、「私の身体（*Ichleib*）」という考えを次のように展開している。「知覚される物は、それだけであるのではなく、私の眼の前に、周囲の事物の間にある。たとえば、ランプが机の上に並んだ本や紙やその他の事物のあいだにある。周囲の事物も同様に『知覚されている』。[...] そして、私の身体は、ともに知覚されているこれら事物に属している」（XVI, 80）。そして、私の周りにあるすべての物は、私の身体に関係づけられる。「私の身体は、いつもとどまっている関係点としてそこにあり、それが現出における右と左、前と後ろ、上と下を決めている。それは知覚において現出する事物の世界のなかで特別な場所を占めている」（*ibid.*）。

フッサールは、私の周りにある物のあいだにある「私の身体」の特殊性を強調している。すなわち、「一方で、身体は、周りにある他の事物と同様に一つの物理的な物である。[...] しかし他方で、この物はまさに身体であり、自我の担い手である。[...] 物理的な事物の構成は、私の身体の構成と奇妙な相関関係において絡み合っている」（XVI, 161f.）。私の身体は特殊な位置をもち、特別な場所「ここ」に位置づけられている。遠くにある物は距離において小さな物にしか見えないし、一つの側面しか見えない。もし私がそれに近づいて行って、周りを回れば、私はそれを詳しく、多面的に見ることができるし、場合によっては、それをじっくりと見て、手に取り、分析できるし、その時、その物がそもそも何なのかを見ることができる。ある物を詳しく見るためには、「その物を回したり押したりしなければならず、その周りに私の体を動かし、近づいたり離れたりしなければならない」（XVI, 155）。

ところが他方で、私の身体は他の物のあいだにある単なる一つの物ではなく、私が見たり、聞いたり、感じたり、嗅いだり、動いたりするための「器官（*Organ*）」である。「眼が動き、頭も上半身も同様に動く。[...] 重要なのは、このように『動くこと』であり、それはキネステーゼ的感覚（*kinästhetische Empfindungen*）において現れる」（XVI, 158）。この「キネステーゼ（*Kinästhesie*）」という現象学的概念（XVI, 154）は、「運動（*kinesis*）」と「感覚

(aesthesis)」から作られた、「運動感覚」とも訳せる造語だが、フッサールはそれを当時の心理学から借りてきて、現象学的な概念へと作りかえた。フッサールはこう述べる。私が何かに触れているとき、「触っている手は、触覚をもっているように『現れる』。触っている対象に関心が向かっていると、滑らかさや粗さは、その対象に属しているように現れる。と同時に他方で、私が触っている手に関心が向かうと、それは滑らかさや粗さの感覚が指先に広がっているのを感じる」(XVI, 162)。それは、言わば、私が物に感じる感覚ではなく、私が私自身の身体を動かすときに感じる「私の身体」の感覚である。

フッサールはそれから 10 年ほど後に『イデー II』のための草稿で「私の身体 (mein Leib)」⁽⁵⁾の考えをさらに展開している。「身体 (Leib) は、あらゆる知覚の媒体 (Mittel) であり、知覚の器官 (Wahrnehmungsorgan) である。それはすべての知覚に必ず居合わせている。[...] 身体は、私の知覚の中心で機能する方位づけのゼロ点 (Orientierungspunkte Null)、ここといまの担い手であり、そこから私が空間と世界の直観をもつのである。それゆえ、それぞれ現れる物は、この身体に対して方位づけの関係をもっている」(IV, 56)。「私はすべての物を向こうに、『そこに』もつが、ただ唯一、常に『ここに』ある私の身体を例外として、なのである」(IV, 159)。

私の身体は、私がそれをもって動いたとしても、いつも私の知覚の中心にある。「私はあらゆる他の物に対して私の立ち位置を自由に変えることができるのに対して、私の身体から離れることはできない。それゆえ、身体がどのように現れることができるかという多様性は、限られている。私は自分の身体の一部だけを特別な短縮されたパースペクティブにおいて見ることができるだけで、他の一部 (例えば、頭) は私にはまったく見えない。あらゆる知覚の媒体 (Mittel) として役立つ同じ身体が、私自身を知覚するときには邪魔をすることになり、それは奇妙な仕方です不完全に構成される物となる」(IV, 159)。

こういう文脈において、かつてメルロ＝ポンティがルーヴェンのフッサール文庫でフッサールの『イデー II』の草稿を読んで、『知覚の現象学』で引用したために有名になった次のくだりに出会うことになる⁽⁶⁾。「私が [右手で] 左手に触ることによって、触覚の現出をもつ。私は単にそれを感じるだけでなく、これこれの形をした柔らかで滑らかな手の現出をもつ。[...] 私はその左手に一連の触覚が広がるのを見出す。それらはそこに『局所づけられる (lokalisiert)』。[...] 私が『左手』という物理的な物について語る時は、私はこうした感覚を無視している。[...] 私が『左手』にそれらの感覚を付け加えても、物理的な物が豊かになるわけではないが、その時、それは身体となり、それが感じるのである」(IV, 144f.)。つまり、「私の身体」は、周りの物と同様な一つの物という客体 (Objekt) であるだけでなく、私がそれによって感じて動くことのできる媒体 (Medium) であるとともに、

それ自身が感じる言わば主体 (Subjekt) となっている。そして、それはまた、「私はできる」を可能にするものともなるのである。

3. 「私はできる」

フッサールは、このような「主体」としての「私の身体」という考えと結びついて、しばしば「私はできる (Ich kann)」という表現を使っている。それは、先に見てきた「私が生きている (Ich lebe)」の内実を表すものと言うことができよう。例えば『イデーニ II』ではこう書いている。「自我は、身体あるいは器官を自由に動かし、それによって外部の世界を知覚することができるという『能力 (Vermögen)』(『私はできる』) をもっている」(IV, 152)。そして、「能力の主体としての自我」と題された第 59 節において、彼はこう述べている。「統一体としての自我は、『私はできる』の体系である。ただしそこで、身体的な『私はできる』とそれに媒介された『私はできる』と、精神的な『私はできる』が区別されねばならない」(IV, 253)。にもかかわらず、それは、私がいつもそうすることができることを意味しておらず、時にはそれができなくなる。そこで、彼は続けてこう書いている。「私はピアノを弾ける。しかし、それはいつもできるわけではなく、練習しなかったので忘れてしまっ、身体を慣らさねばならないこともある。もし私が長い間病気をしていたら、歩く練習をしないとイケないが、やがて歩けるようになる。しかし、私が神経的に病む (nervenkrank) と、私は身体の一部をコントロールする仕方を失い、『私はできない』ことになる。この意味で、私が他者となってしまう」(IV, 254)。

このような文脈で、フッサールは、顕在性と潜在性との関連における「能力」に関わる問題も議論している。「精神的な自我は、能力をもった一つの有機体として捉えられ、しかも、その能力は少年、成年、熟年、老年の諸段階とともに正常な (normal) ⁽⁷⁾ 類型をもつ様式で発達する。主体は多くのことが『でき』て、その『できる』に応じて何かをするように促される。主体はその能力に応じて繰り返し活動し、その能力を変化させ、豊かにしたり強めたり弱めたりする。[...] 能力は空虚な『できる』ではなく、積極的な潜在性であり、それはそのつど顕在化され、つねに活動へ移行する準備があるということである」(IV, 254f.)。私はいつでも何かをできるわけではなく、潜在性から顕在性に、あるいはまたその逆に変化し、それによって「できる」から「できない」に、またその逆に変化する。「できる」はいつでも「できる」ことを意味するわけではなく、ふだんは潜在性にあるのが、必要に応じて顕在性となるような潜在的な能力なのである。

フッサールは、この潜在的な能力について、『イデーニ II』で続けて述べている。「結局これらすべてのことは、主体の根源的能力 (Urvormögen) と、それから、これまでの生の

顕在性に起源をもつ獲得された能力とを遡って示している。人格的な自我は、根源的な発生 (Genesis) において構成されるのだが、それは単に衝動的 (triebhaft) に規定された人格として、つねに根源的な『本能 (Instinkten)』によって動かされ受動的にそれに従う人格としてだけではなく、より高次の自律的 (autonom) で自由に活動し、理性的動機によって導かれる自我としてでもある」(IV, 255)。つまり、「私はできる」というのは、そうした受動性と能動性の絡み合いのなかでの発生を遡って示している。彼はここで、後に 1920 年代に展開することになる発生的現象学にすでに取り組み始めていたと言えよう。

フッサールは、さらに、潜在的な能力である「できる」を実践的な可能性として特徴づけて、こう述べている。「私ができること、その能力があること、できると分かっていること、[...] それは実践的な可能性である」(IV, 258)。そこから、こう続けている。「経験のなかで、その現象学的な特徴によって、『私はできる』と『私はできない』は区別される。抵抗なしにできる行為と抵抗を克服してできる行為とがある。[...] また、抵抗にも克服する力にも程度差がある。抵抗が克服できないこともありうる。そのときには、『それはうまく行かない』、『私はできない』、『私には力がない』ということになる」(ibid.)。フッサールはここで、私が状況に応じてもつことになる「できる／できない」という、本稿のテーマに辿り着くことになる。

4. 「能力に基づく可能性」

このような文脈でフッサールは、次のようなさまざまな言い方で「できる」や「能力」について論じている。「物理的な領野での私の『できる』はすべて、私の『身体的な活動』と私の『身体的なできる』という能力によって媒介されている」(IV, 259)。しかしながら、私はいつでも何かを「できる」わけではなく、時にはあることをすることができない。例えば、「私の手は『しびれてしまった』。いまや私はそれを動かせない、それは一時的に麻痺している。[...] 邪魔になっているものを私の手が脇にやることができれば、それは『うまく行く』。しかし時には、そうすることが『困難』であったり、『それほど困難ではなかったり』、『抵抗がない』だったり、時にはまったくうまく行かない。どんなに頑張っても抵抗が克服できないこともある」(ibid.)。そこで彼はこのように結論づける。『『できる』』ということの、単に『論理的』な可能性と『実践的』な可能性を区別することが重要である」(IV, 261) と。

フッサールは後に、例えば『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1938) では、この『できる』の実践的可能性つまり能力に基づく可能性を「可能性 (Vermöglichkeit)」⁽⁸⁾ という合成語で呼んでいる (VI, 164 et passim)。ここで、前述の「身体」「地平」「潜在性」

という考えと、この「可能性」という考えとのあいだに橋を架けるとするなら、「地平」というのは、「私の身体」の「行くことができる」という可能性によって開かれるものだと言えよう。それは空虚な「論理的」可能性ではなく、私の「できる」によって動機づけられた「実践的」な可能性、すなわち可能性なのである。こうして、地平は可能な経験の「遊動空間 (Spielraum)」となり、私の「できる」によって開かれる可能性の空間となる。

しかしながら、地平は「私は行くことができる」の可能性によって開かれるだけでなく、「私は行くことができる」の可能性によって限定され、逆に、「私は行くことができない」によって制限され、この可能性に依存しているとも言わねばならない。この点において、前述の発生的現象学につなげて言うならば、この地平は、少年、青年、老年という私の発達の段階に、また健康、病気、疲労、覚醒、または睡眠と言った私の状態に応じて多様性をもつことになる、と言えよう。そして私たちはそれぞれに、異なる能力と可能性をもつことになり、行くこと、見ること、聞くこと、嗅ぐことの多様性をもつことになる。要するに、私たちはそれぞれに、異なる可能性の地平をもち、その多様性は、私たち自身の「できる／できない」に依存しているわけである。

5. 「正常性と異常性」

このような関連でフッサールはしばしば、『間主観性の現象学』の生前未公開の草稿に見られるように、「正常 (normal) と異常 (abnormal)」という対比を使っている。しかし、彼はそれを、差別をもたらすためにではなく、彼の発生的現象学を展開するために使っている。私たちも注意深く検討しなければならない。彼はこう書いている。「異常というのは正常の変様態 (Modifikation) であり、そこから際立ってきて、場合によって必然的に現れる出来事としてそこに付け加わる。[...]個々の主体はそれぞれの正常をもっているが、そのうちで場合によって正常を妨害するものとして異常が現れる」(XV, 154)。さらにこう続けている。「正常はさまざまな形式と段階をもっており、それらは、その人が一緒に成長し、子供から正常な成熟した大人になるまで一緒にいる人間たちのなかでの人間の構成に本質的に属している」(ibid.)。「子供」もまた、「正常な成熟した大人」との対比においては、そこからはずれている「異常」と特徴づけられる。異常というのは、あくまでも正常との対比のなかでのみ使われる相対的な概念なのである。

そして、正常が多様な段階をもっているのと同様に、異常もまた多様な段階をもっている。フッサールは、こう書いている。「正常性において構成される世界は、同時に、異常性をもうちに含んだ世界として構成される。[...] どれほど正常と思われる主体でも、いつで

もその正常な経験からの異常な逸脱をもつことがありうる」(XV, 155)。「正常な成熟した大人」を標準として考えているフッサールは、そういう異常な逸脱の例として、「子供」「狂人」「病気」「睡眠」「意識不明」といった語を挙げている。しかし、彼はこれらの例を差別する意図ではなく、正常の「変様」「段階」「変化」として導入しているのである。

そこで彼は、発生的現象学に特有の、「解体 (Abbau)」(XV, 133) と呼ばれる発生的方法について語っている。この方法によって、正常な世界の構成の或る次元が欠落している段階を想像することにより、私たちは「狂気」(正気の欠落)、「病気」(健康の欠落)、「睡眠」(覚醒の欠落)、「意識不明」(意識の欠落)といった異常の世界を想像することができると言う。これは言わば、異常を正常の変様態として理解するための方法なのである。要するに、フッサールは、正常と異常の対比をむしろ相対性において捉えていることになる。彼はこう書いている。「異常な人々は正常な共通世界の特徴の特定の層に関してのみ異常なのであって、その他の点においては正常な人々とまったく調和した経験をもっており、その点では正常なのである」(XV, 158)。

私たちはこの「正常／異常」の相対性を「できる／できない」という観点から理解することができる。正常というのは、正常な人々のように何かをすることができる能力（それゆえ、空を飛ぶ能力や瞬間移動する能力は含まれない）によって特徴づけられるのに対して、異常というのは何かができないことによって特徴づけられる。この「できない」が、正常な人々のように何かをすることが「できる」を彼らから妨げている。もし私が異常な状況に陥れば、私は私の正常な状態ではできていたことができなくなる。

フッサールは『現象学の限界問題』のあるテキストでこう書いている。「私が何らかの病気になる。私は内側から異常という体験をもつ。悪い感覚が続くがゆえに、私は正常な仕方でき、慣れ親しんだ能力を遂行し、私の考えをまとめるといったことができないという弱さの意識をもつようになる。私は意識が失われていくように感じる」(XLII, 2)。私は、病気という異常な状況のなかで、正常な状況においてもっていた私の能力を失う。前述のように、私の能力が私の地平を、そして「地平の地平」としての「生活世界 (Lebenswelt)」を開いてくれたのだが、私の能力の喪失は、私の「生活世界」⁹⁾を制限してくることになる。

正常と異常の他の例として、前述のように、フッサールは「大人」と「子供」も挙げているが、これは、発達と発生的現象学の用語においても理解されるだろう。しかし、発生的現象学は、発達と発生の問題（私たちがどのようにして能力や正常をえるようになったのか）だけではなく、老化や喪失の問題（私たちがどのようにして能力と正常を失い、障がいと異常に陥るのか）という問題をも含んでいるとも考えられる。それは、もはや発生

的現象学というよりも、あえてフッサールから離れて言えば、衰退的・喪失的現象学 (de-genetische Phänomenologie) とでも呼ぶべきかもしれない⁽¹⁰⁾。

そして私にとって関心があるのは、フッサールがこのような文脈において、異常の極端な極として「誕生と死」(XV, 138 et passim) の問題をしばしば挙げていることである。彼は両方の極端な場面を、現象学的方法がうまく対処することのできない「限界の問題」(cf. XLII) と特徴づけている⁽¹¹⁾。そして、彼自身こう自問している。「世界、誕生、死を真剣に本質関連に据えること、そして、それが単に事実というのではなく、どこまで世界と人間が誕生と死なしには考えられないのかを明らかにすることが重要である」(XV, 171f)。

私自身、この 10 数年の間、「老いと死」の問題に関心をもってきたが、フッサールもまた次のように書いている。「私自身もやがて死ぬだろう—ちょうど、私がかつて生まれ、大人へと成長し、老いてきたように。しかし問われるべきは、このことは何を意味しているか、である」(XXIX, 332)。あるいは、言い換えれば仏教用語でいう「生老病死」の問題に関心をもって来たわけだが、フッサールも晩年の草稿 (1930/31) で、「誕生、老い、病い、死 (Geburt, Altern, Krankheit, Tod)」(XV, 168) という語を使っている。しかし、こうした主題は本稿のテーマを越えており、別の機会に論じられねばならない⁽¹²⁾。

おわりに

最後に、フッサール現象学における「できる／できない」の問題と、私が取り組んできた「間主観性の現象学」というテーマの繋がりを示唆しておきたいと思う。前述のように、彼は正常と異常を相対性において論じていて、両者は相互の関係においてのみ語られるべきだと考えていた。そうすると、「できる／できない」の対比も、単に個人においてではなく、相互の人間関係において論じるべきではなかろうか。「できる／できない」は、個々人が他の人々との関係なしにそれぞれが単独でもっている特徴ではないだろう。それゆえ、私がここで紹介した「能力に基づく可能性」という概念も、個人に属している何かではなく、個々人が生きている環境や人との関係の特徴づける何かと理解されるべきだろう。ところが、私見によると、フッサールのテキストのなかにこのような思想をはっきりと表現するようなくだりを見つけることは困難である。にもかかわらず、彼が「できる／できない」という問題を確かに間主観性の現象学という文脈において論じていたことは重要であり、注目すべきことであると、私は考えている。

註

(1) その試みの一つとして、Hamauzu (2013), Hamauzu(2014)を参照。

- (2) なお、本稿は、PEACE VII Conference “Phenomenology of Dis/Ability” (Tokyo University Komaba Campus, 16-18. December 2016) での口頭発表 ‘On Possibility of Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology’、中国・广州中山大学 (2017 年 3 月 8 日) での講演「フッサール現象学における『能力と障がい』の問題について」、および Nordic Society for Phenomenology, Annual Conference “Phenomenology and the Body – Contemporary Perspectives” (NTNU, Trondheim, 17 June 2017) での口頭発表 ‘On Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology’¹⁾に基づいて、加筆修正したものである。それぞれの機会に質疑応答・ディスカッションに参加いただいた方々に感謝いたします。中山大学での講演では、「能力と障がい」としたが、そうすると、本稿とは必ずしも直接関係しない「障がい」概念をめぐるいろいろなと断らないといけなことが出てくるので、フッサールが使っているシンプルな表現で「できる／できない」に戻すことにした。
- (3) 慣例に従い、『フッサール全集 (Husserliana)』からの引用については、本文中括弧内に、ローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を表記する。
- (4) “Ichleib”は文字通りには「自我身体」とでも訳すべきかも知れないが、ここでは後に使うようになる“mein Leib” (e.g. IV, 94 et passim) と同じことを考えていると思われるので、あえて硬くこだわらず、「私の身体」と訳しておく。『物と空間』の英訳者である Rojewicz は、硬く“Ego-Body” (自我身体) と訳している。
- (5) 前述のように、フッサールは『物と空間』では、「私の身体 (Ichleib)」という造語を使っていたが、後の『イデー II』では「私の身体 (mein Leib)」または端的に「身体 (Leib)」という語を使っている。周知のように、「身体 (Leib)」という語は、「物体 (Körper)」と対比的に使われ、もともと語源を「生 (Leben)」と共有しており、「生きている」という意味が含意されている。そのため、それを英語で訳す時には、「生きている身体 (living body)」ないし「生きられた身体 (lived body)」という訳語が使われる。
- (6) 先に引用した『物と空間』の箇所が続く箇所でも、つまり『イデー II』に先立つ時期にフッサールは、以下『イデー II』から引用するのと同じいわゆる「二重感覚」について触れている。「左手で右手に触れると、触覚と運動感覚をもって、左手と右手の現出が、一方が他方のうえでこれこれの仕方動いているという仕方交互に構成される」(XVI, 162)。
- (7) “normal”という語、そして後に触れる“abnormal”という語を、それぞれ「正常な」と「異常な」と訳すことには躊躇を覚える。「正常／異常」という対語が、差別に導くような過剰な価値判断を帯びているように聞こえるからである。フッサールの含意するところについては後に触れるが、「通常の／通常ではない」くらいに訳した方がいいかも知れない。本稿では、暫定的に「正常な／異常な」で訳しておく。
- (8) これは、「能力 (Vermögen)」という語と「可能性 (Möglichkeit)」という語から合成された語なので、多少の無理は承知のうえで、「可能性」と訳すことにする。
- (9) 「生活世界 (Lebenswelt)」という語を『ヨーロッパ諸学の危機』のフッサールは、自然科学的に解釈された世界との対比で、言わば〈ひとつの生活世界〉として使っていたが、ここでは、ゆるやかに解釈して、それぞれがその「できる／できない」の可能性性によって開かれる地平の地平として、〈それぞれ (各人) にとって異なる生活世界〉が開かれるとしたが、フッサールの用語ではむしろ「故郷世界 (Heimwelt)」とした方がいいかも知れない。しかし、かつてクレスゲスが「生活世界の二義性」を指摘したが、彼の指摘に抗して、現象学用語のほとんどが自然的態度と超越論的態度の二義性をもっているとも言える。確かに、『危機』に見られるように、生活世界と自然科学的世界を超越論的態度において比較する時は、間主観的な一つの生活世界が語られているようが、『イデー II』に見られる人格主義的態度においては、彼自身、〈複数の生活世界〉を語っている。本稿での用法は、この方向での考察として考えられている。
- (10) このような衰退的・喪失的現象学の例を、Beauvoir (1970) のうちに見ることができよう。
- (11) 「誕生と死」は私たちにとって「自然な」「正常な」過程であるのだから、それを「異常な極」と呼ぶのは不適切かも知れない。ここでそう呼ぶのは、あくまでも私の一人称パースペクティブからであり、私が日常生活のなかで慣れている「正常」から出発する限りであろう。それに対し、もし人間存在についての三人称パースペクティブから語るなら、「誕生と死」は「私たち」にとってまったく正常なものであり、異常なものでも限界的なものでもなかろう。私たちは二人称や三人称の「誕生と死」を観察することができるが、私自身の「誕生と死」を私の一人称パースペクティブから観察することはできない。この意味では「誕生と死」の現象学的研究は「限界の問題」と言わねばならないだろう。
- (12) フッサール現象学からは少し距離を置いてではあるが、浜渦 (2015) で論じた。

文献

- Beauvoir, Simone de (1970). *La vieillesse*, Gallimard. (『老い』)
- 浜渦辰二 (1995). 『フッサール間主観性の現象学』, 創文社.
- Hamauzu, Shinji (2013). 'Caring und Phänomenologie - aus der Sicht von Husserls Phänomenologie der Intersubjektivität,' Dieter Lohmar und Dirk Fonfara (Hrsg.), *Soziale Erfahrung, Phänomenologische Forschungen*, Hamburg, Felix Meiner Verlag.
- Hamauzu, Shinji (2014). 'Towards a Phenomenological Approach to the Problem of Organ Transplantation after Brain Death,' Kwok-ying Lau / Chung-Chi Yu (Eds.), *BORDER-CROSSING - Phenomenology, Interculturality and Interdisciplinary*, Würzburg, Königshausen & Neumann.
- 浜渦辰二 (2015). 「生老病死と共に生きる—ケアの臨床哲学にむけて—」, 日本哲学会編『哲学』No.66 (pp.45-61), 知泉書館.
- Husserl, E. (1973). *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, Husserliana Bd.I, Den Haag, Martinus Nijhoff. (2001, 浜渦辰二訳, 『デカルト的省察』, 岩波書店)
- (1977). *Ideen zu reiner Phänomenologie und phänomenologische Philosophie, Erstes Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, Husserliana Bd.III/1, The Hague, Martinus Nijhoff. (『イデー I』と略記)
- (1952). *Ideen zu reiner Phänomenologie und phänomenologische Philosophie, Zweites Buch, Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, Husserliana Bd.IV, Den Haag, Martinus Nijhoff. (『イデー II』と略記)
- (1976). Ders.: *Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Husserliana Bd.VI, Den Haag, Martinus Nijhoff. (『ヨーロッパ諸学の危機』と略記)
- (1959). *Erste Philosophie (1923/24) Zweiter Teil, Theorie der phänomenologischen Reduktion*, Husserliana Bd.VIII, The Hague, Martinus Nijhoff. (『第一哲学』と略記)
- (1973). *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität*, Texte aus dem Nachlass, Erster, Zweiter und Dritter Teil, Husserliana Bd.XIII—XV, Den Haag, Martinus Nijhoff. (2012/13/15, 浜渦辰二・山口一郎共監訳『間主観性の現象学 I / II / III』筑摩書房)
- (1973). *Ding und Raum, Vorlesung 1907*, Husserliana Bd.XVI, Den Haag, Martinus Nijhoff. (2010, *Thing and Space: Lectures of 1907*, translated and edited by Richard Rojcewicz, Dordrecht/Boston/London, Kluwer Academic Publishers; 『物と空間』)
- (1974). *Formale und Transzendente Logik, Versuch einer Kritik der Logischen Vernunft*, Husserliana Bd.XVII, Den Haag, Martinus Nijhoff. (『形式的論理学と超越論的論理学—論理的理性批判の試み』)
- (1993). *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Ergänzungsband, Texte aus dem Nachlass 1934-37*, Husserliana Bd. XXIX, The Hague, Kluwer Academic Publishers. (『危機補巻』)
- (2014). *Grenzprobleme der Phänomenologie, Analysen des Unbewusstseins und der Instinkte. Metaphysik. Späte Ethik (Texte aus dem Nachlass 1908 – 1937)*, Husserliana Bd. XLII, New York, Springer. (『現象学の限界問題』)
- Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie du la Perception*, Paris, Gallimard. (『知覚の現象学』)

〔大阪大学大学院文学研究科・教授〕